

— 書 評 —

穂積五一先生追悼記念出版委員会発行

『内観録 穂積五一遺稿』を読んで

——ひとすじの道——

(中国研究所理事) 小島 晋治

穂積先生が亡くなられてから、すでに5年の歳月が経った。今、この先生の遺稿を読み終えて、なんとかかけがえのないすぐれた先人を私たちは失ってしまったのか、という嘆きを新たにした。

私事に涉るが、私は先生に3回お目にかかり、お話をうかがったことがある。

最初は敗戦の年の暮れか、その翌年の春さき、至軒寮から新星学寮と改名されたばかりの寮内の先生の居室だったと思う。現在、故郷の茨城県古河市長をしている同郷の友人が、至軒寮で生活していたことが機縁だった。17歳で敗戦を迎え、生きる軸を失って彷徨しつつ、旧支配層の醜態や言論人・教師のにわかな変節に無性に腹を立てていた私に、まじりけのない愛国者がいると、この友が穂積さんを紹介し、同行してくれたのである。

彼から、先生は上杉慎吉博士の高弟で、新人会と対立した右翼の七生社のメンバーであったこと、東大卒業後就職を拒否して質素な生活を続けながら、労働者、農民、被差別部落の人々に深い愛を寄せつつ、平等の理想の実現をめざしておられること、戦争末期に東条打倒計画に連坐して逮捕されたことなどを聞いていた。彼の話から、私は志士風の風貌を勝手に思い描いていた。だがお会いして話をうかがううちに、むしろ心の温かい求道者、宗教家のような印象を受けた。右翼人風の激越な話は一切なかった。だが、ホンモノの人間だけが持ち得るある種の強烈な迫力を感じた。『内観録』第4部に掲載されているいくつかの「インタビュー・対談」、また、もと李承晩政権の内務大臣だった張璟根氏の身元引受人になったことについて記された「張さんのこと」を読んで、私は

先生の生き方の根底には、その生涯を一貫して、「人ひとりの生命が危険にさらされたとき、何をおいてもこれを守る」という徹底した人間尊重の思想と、生きとし生けるものは平等であるという身についた感覚——それは少年期に母上が被差別部落の人に示した、高貴な人間的態度から得た所が大きいと思われる——があったことを知った。だからこそ1930年代に上杉博士が主宰していた至軒学堂の勉強会の人達が「志士ぶるのが性に合わず」、また「テロを否定」する一方で、戦前、戦中にすでに朝鮮独立運動を支持、支援し、また加藤完治の満州移民計画を手伝うよう、先生が尊敬されていた古在由直東大総長から話が合ったさい、加藤氏と激論し、それは中国人の不満とうらみを買う計画であるとして反対し、拒否するというまことに得難い態度がとれたのである。右翼人とされていた時代から、アジアの独立と繁栄への志向と実践は一貫していたのである。

1978年の戴国輝氏との対談で、先生は戦時中至軒寮にいた朝鮮人留学生との交流にふれて、『人間も国家も自主独立すべきだ』『大東亜戦争はアジア解放の戦争のみが是認されるが、その前に満州・朝鮮・台湾をまず解放せよ』と言うのがお互いの主張でした』（458頁）と語っている。明治末年以来、第2次大戦まで、アジアの独立や「大東亜」の「共栄」を語ったアジア主義者やナショナリストはあまたいる。しかし「朝鮮・台湾をまず解放せよ」と主張し、その独立運動者を実際に援助した日本人ナショナリストは先生をおいてはいないのではなかろうか。こういう人がいた、ということを知り得るだけでも本書を読む値打ちがあると私は思う。

二度目にお会いしたのは、1973年、たまたま旅行者としてバンコックにいて、学生たちによるタノム軍事政権打倒の運動をまのあたりにした直後だった。この戦いの中で若い命を散らした学生を追悼する集会が、タイを始めとする東南アジアか

らの留学生によって、東京のさる公園で開催された時のことである。この旅行に同行してくれたシンガポールからの留学生をつうじて、私は先生がアジアからの留学生に深く信頼されている珍らしい日本人であることを知らされていた。この追悼会の場で、私は敗戦後間もない時期にお会いしたことがあること、またタイの学生の運動が民衆の広い支持を得ていると思われたこと、トラックに上半身裸でぎっしり乗り、手を振りあげて昂揚した精神をみなぎらせていた学生たちが、街のところどころにある仏像の前を通る時、必ず合掌している姿が印象的だったことなどを話した。先生は「そうであろう」と、学生たちの運動に深い共感を表明された。

本書に収められているこの前後に書かれた多くの文章を読むと、前年成立した日・タイ経済協力協会の理事長に就任されていた先生は、タイ留学生や海外技術者研修協会の研修生出身者をつうじて、こういう運動の爆発に近いこと、それは経済協力という名の下で、自国、自企業の利益のみを追求する経済侵略を行っている日本に対する、反日運動の性格を必ず同時にもつに至るであろうことを予測し、関係者たちに警告を発しておられたのである。

この前後から、亡くなる少し前まで、『アジアの友』『研修』『のろし』などに書き続けられた文章を読むと、日本のアジアにたいする関わり方が、戦前、戦中と本質的に少しも変わっていない支配者、搾取者としてのそれであり、ますますそういう性格を強めていることへの怒りといらだちが、年々つのっていかれたように思われる。73年以降の文章や座談会の発言の中では、「私のこの頃の実感は、だんだん自分が日本人から離れるんですよ。自然に離れるんです。アジアの人々に学んで暮していると、さうなるんです。それだけアジアの人に近づいてゐるように思へます。これはどうしようもないですね」（398頁）に代表され

る感慨がしばしば表明されている。

だが一方で、先生は最後まで個人のそれと同じく、日本を含むすべての民族の自主と独立を第一義的に尊重するナショナリストでありつづけた。それは「日本文化の中枢」である「国語」を「敗戦による日本人の放心状態をよいことにそそくさ（非自主的に）改訂」したことに抗議して、「今の仮名遣ひは敗戦の申し子であるから、私はそれを用ゐない」として「歴史的仮名遣ひ」を頑強に使用しつづけられたこと、また新憲法についても、その内容の良し悪しではなく「占領軍の世界政策のなかの日本憲法として、日本に与えられたもの」であるとして、敗戦後の日本における『灰色の「民族喪失」色』のひとつとして見ておられること（247—8頁）などに鮮明に表現されている。「ひとりよがりの日本的論理をおし立て、厚かましい振舞いをやめない」日本人にたいする「日本人はいやだ」というアジアの人々の心に共感し、このままでは「彼此の矛盾と対立は増すばかりである。大衝突は避け難い」と、破局の到来を予感しつつ、先生はアジアと真に共存し得るような、真の日本人、日本民族のあり方を、その生涯をかけて追求し、実践されつづけたのである。この稀有の、そして最も良質なナショナリストとしての先生のあり方は、中国との関係についての発言の中にも鮮明にあらわれている。

先生に最後にお目にかかったのは、1979年6月だった。南京で開催された太平天国学術討論会に出席したさい、紫金山天文台に勤務している劉彩品さんから、先生宛の漢方薬を託され、赤門前の新星学寮に届けに行った。劉さんは厳しい人だが、先生を深く尊敬し、その健康状態に親にたいするような心配を寄せていた。劉さんと先生との人間的信頼で結ばれた強い絆の一端は、本書のいくつかの文章にも示されている。この最後の訪問のさいにも、劉さんの近況についてたずねられ、坊やたちも含めてすこぶる元気であったことをお伝え（40頁へつづく）

り、王光美を虜にしたことを伝えて来ると、蒯大富は狂わんばかりに大喜びし、董申に向かって言った。

「すぐに中央文革小組に連絡をとって、明朝9時から王光美の批判集会を開催すると、伝えて下さい」

董申も笑う。

「蒯司令は全く策士ですな。私がもし、西側で記者をしていてこのニュースをスクープすれば、間違いなく百万長者になれたでしょう」

これ正に、

忠臣自ラ忠臣ノ節有り、

奸佞懐ニ奸佞ノ心ヲ存ス。

の言葉通りである。王光美の運命が如何にあいなくてゆくかご存知になりたいくば、次回をご覧頂きたい。

(43頁からつづく)

典》編写組 上海人民出版社 1977 2冊

(2733p) 27cm

中医大辞典 基礎理論分冊(試用本) 《中医大辞典》編輯委員会編 人民衛生出版社 1982

355p 26cm

中医大辞典 婦科兒科分冊(試用本)

同 上 1981 221p 26cm

中医大辞典 中藥分冊(試用本)

同 上 1983 612p 26cm

中医大辞典 方劑分冊(試用本)

同 上 1982 612p 26cm

中医名詞辞典 香港 太平書局 1964 204p

18cm

中医名詞術語詞典 中医研究所他合編 香港 商務印書館 1975 585p 20cm

1985年12月現在

以上

(49頁からつづく)

すると、大変喜ばれ、最近寮やアジア文化会館にも中国大陆からの留学生・研修生が生活するようになったこと、この留学生にたいする日本政府や企業の対応に、多くの問題があることを語られた。

劉さんが格別先生を尊敬している理由の一つは、彼女が「中華民国」を拒否して、台湾への強制送還の危機に見舞われたさいの、先生の首尾一貫した姿勢と支援にあったと思われる。だがそれだけではなくて、先生が中国侵略の歴史をしかと踏

まえて、最も原則的・道義的立場に立って、日中関係上の具体的問題に対処しておられることを、劉さんが鋭く見抜いていたからだろう。

本書は、今日の日本において、とめどもなく風化しつつけている日本とアジア、日本と中国のあるべき関係の原点を、孤高のヒューマニスト、ナショナリストの身を持するに厳なる生涯の軌跡そのものをつうじて提示した、まさしく「警世の書」である。

(1983年7月刊, A5判, 517頁, 非売品)